

特集

音楽×情報処理

編集にあたって

太田智美 | 大阪音楽大学


情報の分野には、音楽が好きな人が驚くほど多い。自身で演奏や作曲をしていたり、研究をしていたりと、そのかわり方もさまざまである。しかし、そんな光景を目にするたびに、どこか複雑な想いがあった。——音楽大学を卒業し、情報の分野に足を踏み入れてから約15年経つが、情報分野で「音楽大学」の文字を目にすることはほとんどない。そして、情報の分野から音楽へのアプローチをすることはあっても、音楽の専門家が情報の分野へとアプローチする光景は、ほとんど目にしてこなかった。

そんな背景から、本特集では音楽の専門家が情報処理について執筆してもらうことにこだわった。「情報処理について執筆をお願いします」と言うと、「情報処理についてかかわったことがないので何を書けばいいのか」という相談を多く受けた。しかし、音

楽家こそ情報処理を巧みにこなすプロフェッショナルたちである。本特集を通じて、そんな音楽家たちの情報処理の世界を一緒に垣間見られたらと思う。

本号では、素晴らしいピアニストとして知られるまなまる（永藤まな）さんを巻頭コラムに、特集の全章をプロの音楽家による原稿で構成している。

1. コミュニケーションとしての音楽の在り方
2. 弦楽器と情報処理
3. 管楽器と情報処理
4. 打楽器と情報処理
5. 古楽と情報処理
6. ジャズと情報処理
7. 情報処理と新たな音楽の可能性



第1章では、国立音楽大学の吉成順特任教授が執筆する「コミュニケーションとしての音楽の在り方」。コミュニケーション学を軸に、本特集の大枠が描かれている。第2章では、NHK交響楽団のヴァイオリン次席奏者でありウェールズ弦楽四重奏団のヴィオラ奏者の横溝耕一さんが執筆する「弦楽器と情報処理」。演奏の際の情報処理について、オーケストラと室内楽の観点から自身の実体験をもとに生々しく語られている。第3章は、フルート奏者森岡有裕子さん執筆の「管楽器と情報処理」。実際に使っている楽譜を用いて、楽譜からどのように情報を読み取り、情報分析をして、演奏に導くかが書かれている。第4章は、打楽器奏者の悪原至さん執筆「打楽器と情報処理」。音程の伴わない0.01秒の情報処理と向き合う世界が繰り広げられている。第5章は、ロバの音楽座／カテリーナ古楽合奏団の松本更紗さんが執筆する「古楽と情報処理」。彼女の

語るバロック時代の音楽と舞踊の話はとても貴重で、この分野は教育機関でもなかなか触れられないことが多い。第6章は、世界で活躍するジャズ作曲家の挟間美帆さんによる「ジャズと情報処理」。クラシックとジャズの情報処理方法の違いを記している。そして第7章は、「情報処理と新たな音楽の可能性」と題して「バーコーダー」という新しい楽器を開発した田中秀樹さんが執筆した。

「ある点を超えると、すべての分野の人と話ができるようになる」——博士論文執筆の指導を受けていたころ、ある教授からこんなことを言われたことがある。おそらく専門分野の異なる方がほとんどだと思うが、この会誌を手にとった皆さんはきっと執筆者たちと“会話”ができたのではないだろうか。

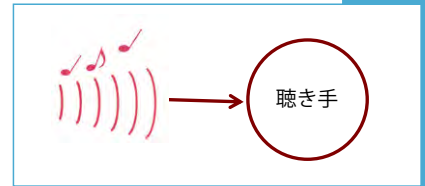
(2024年3月13日)

概要

1 コミュニケーションとしての音楽の在り方

吉成 順 | 国立音楽大学

音楽のコミュニケーションとしての在り方を幅広い視野で考える。実際の音楽は複雑で、「作曲→演奏→聞き手」という単線的な図式には限界がある。回路は奏者の数や聞き手の数に応じて数多くしかも双方向に存在する。演奏には揺らぎがあり、音ではなく視覚的・身体的要素もある。作曲者のいない音楽、演奏のない音楽もある。音楽的コミュニケーションの基本は音楽を捉える人の心であり、それが複雑に連関して多彩な音楽が生じている。



一般

2 弦楽器と情報処理

横溝耕一 | NHK 交響楽団 ヴァイオリン次席奏者/ウェールズ弦楽四重奏団 ヴィオラ奏者

音楽家にとって情報処理とは遠い存在のような気がしていた。古くは400年ほど前に作曲された作品を瞬間で再現する、再現芸術であり、無形芸術であるクラシック音楽。中でもアンサンブルという、複数の人間が同時に共感し、音を紡ぐ状況下に焦点を当て、情報処理の専門的な目線ではなく、1人の演奏家として、作品とどのように向き合っているのかをお伝えしていく。

一般

3 管楽器と情報処理

森岡有裕子 | フルート奏者

音楽家にとって重要なポイントに、テクニックと音楽とのバランスがある。それには情報処理というプロセスが欠かせない。本稿では一度限りの体感型アートであるコンサートでの成功を目的とし、その達成に必要な①音楽家に必要なアスリートとしての能力や技術の向上と、②アーティストとしての楽曲理解や表現方法にフォーカスしている。その両方がバランスよく作用した結果、聴衆、共演者、演奏者本人に感動を与えることができる。



一般

4 打楽器と情報処理

悪原 至 | 岐阜聖徳学園大学 教育学部

打楽器の演奏時に、奏者は意識的な動作と無意識の動作の両方を通じて情報処理を行っている。1人での練習時は、反復練習を行う中で自身の情報感度を上げることや、自身のイメージした理想の音とのギャップを認識し解決策を探る情報処理が行われている。複数人で演奏する際には、打楽器奏者は特にアインザッツをそろえることに神経を使い演奏を行っている。打楽器の音は噪音であることが、ほかの楽器と大きく異なる要素である。



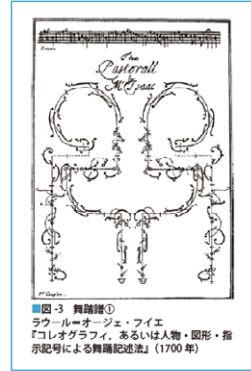
一般

5 古楽と情報処理

松本更紗 | ロバの音楽座／カテリーナ古楽合奏団

音楽があるから踊りが生まれたのか、それとも踊りがあるから音楽が生まれたのだろうか？ フランスのバロック期の演奏をする際に欠かせない「踊り」と「音楽」の関係性から読み解く古楽そして、時代背景と、今後の課題は何だろうか？

過去の出来事を情報処理することによって生まれる新たな芸術に目を向けつつ、再び過去から学ぶ、その連続。



一般

6 ジャズと情報処理

挾間美帆 | ジャズ作曲家

一般的に音楽を学ぶ際いちばんに思い浮かぶのが「楽譜を読む」ということだが、ジャズという音楽には、特定の楽譜や記譜が極端に少ないなかで自由に即興する部分が多く存在する。どのようにして演奏や作品の向上に情報処理を活用しているのか、ジャズ音楽家の目線で考察する。



一般

7 情報処理と新たな音楽の可能性

田中秀樹 | エレクトロニコス・ファンタスティコス！

役割を終えた電化製品を新たな電子楽器へと蘇生させ、徐々にオーケストラを形づくっていくプロジェクト「エレクトロニコス・ファンタスティコス！」。これまでにブラウン管テレビ、扇風機、換気扇、ビデオカメラ、エアコン、電話機などの数々の家電を楽器化してきた。本稿では、バーコードリーダーを改造した楽器「バーコーダー」の内部構造と発音の仕組みの紹介、そして演奏中に関する情報処理について考察する。



一般